

<前回：近代文学1・英文学>

(1) 宗教改革と西欧近代

1. 「聖書のみ」(聖書主義)の理念が歴史的な現実となるには、数百年の時間が必要であった。=近代的西洋の成立!
2. 聖書の近代語への翻訳 → 西欧国民文化の基礎
  - ・西欧近代の国民文学は、キリスト教との密接な関わりにおいて論じ得る。宗教は文化の母体である。
  - ・近代の基本原理としての自律性・自由。  
近代文化(特に、啓蒙主義的近代)は宗教的基盤からの解放を目指した。
  - ・西欧近代の国民文学は、宗教的基盤からの分離において、それ自体として論じ得る。
3. ヨーロッパ近代におけるキリスト教的伝統の多様性:  
多様性における統一性(聖書→翻訳、ラテン語→近代語)。

(2) 英国国教会と19世紀のイギリス

4. 英国国教会: Via Media・中道(カトリックとプロテスタントとの)  
国民国家の統合、諸階層のゆるやかな協調→貴族的文化と労働者への配慮  
キリスト教社会主義、労働者伝道
- 5 「文学に関するもろもろの定義が現在のようなかたちをとりはじめたのは、実のところ、『ロマン主義の時代』以降のことだ。『文学』という言葉の中に現代的な意味が発生したのは十九世紀なのだと言ってもよい」(T・イーグルトン『文学とは何か——現代批評理論への招待』大橋洋一訳、岩波書店、1985年、30頁)
6. 「識字層の拡大と国教会および福音主義的な非国教会の布教活動がこのような悲惨な目に遭っていた労働者階級に対して活発に行われたことも事実です。そして、そのような中で、彼らに向けた宣教的なキリスト教大衆文学作品の創作活動が芽生えたのでした。とにかく、ヴィクトリア朝時代、キリスト教の各教派は活発に大衆文学作品を生み出していったのです。」(9)

(3) ディケンズ『クリスマス・キャロル』

7. チャールズ・ディケンズ(Charles John Huffam Dickens, 1812-1870)。ヴィクトリア朝を代表する国民的作家。下層階級を主人公とし、弱者の視点で社会を諷刺した作品群を発表した。『オリバー・トゥイスト』など。
9. 『クリスマス・キャロル』の成功。キリスト教の教理(罪、隣人愛、人間の再生・新生・救済)を、小説・文学として見事に表現。英文学の一つの機能。

(4) C・S・ルイス

10. イギリス児童文学へのキリスト教の影響。19世紀以降のイギリスは、『不思議の国のアリス』のルイス・キャロルなど、児童文学の黄金時代。
11. ルイス(1898-1963): 文献学者・言語学者から作家へ。神話的題材、SF小説(『ナルニア国物語』など)と宗教的著作。友人トールキン(1892-1973)との交流・影響。作家の創作は、神の創造行為と類比され得るような、準創造行為である。しかし、神の創造が規範・源泉。
12. 近代人: 第一の素朴さ→批判・懐疑・無神論→第二の素朴さ  
「ルイスは一六歳になった頃にはすでに確固たる無神論者であった。」(マクグラス、22)
13. 物語を読解する行為と物語的自己同一性。  
「きみたちはどの物語の中に生きているのかね」(マクグラス、63)

## 9. 近代文学2：フランス文学

### (1) アンドレ・ジッド

#### 0. フランス文学とキリスト教

- ・フランス革命と実証主義哲学（コント）による打撃
- ・「十九世紀におけるカトリック復興」：「一八七〇年ごろから第一次世界大戦前後にかけて、フランスの文明史の流れのなかに現出した顕著な事象の一つ」、「近代から現代にいたるフランスのカトリックの思想家や作家たちのほとんどが、この事象の水脈のなかで活動しつづけてきた。」（渡辺義愛、60）

#### 1. アンドレ・ジッド(1869-1951)

キリスト教と近代の緊張、そこにおける人間の誠実と自由の追求（ヒューマニズム）  
ローマ・カトリック的伝統とフランス革命。マイノリティとしてのプロテスタント。

#### 2. 『狭き門』(1909)：ジェロームの回想とアリサの日記

「13:22 イエスは町や村を巡って教えながら、エルサレムへ向かって進んでおられた。23  
すると、「主よ、救われる者は少ないのでしょうか」と言う人がいた。イエスは一  
同に言われた。24 「狭い戸口から入るように努めなさい。言っておくが、入ろうと  
しても入れない人が多いのだ。25 家の主人が立ち上がって、戸を閉めてしまっ  
てからでは、あなたがたが外に立って戸をたたき、『御主人様、開けてください』と  
言っても、『お前たちがどこの者か知らない』という答えが返ってくるだけである。」  
（ルカ福音書、新共同訳）

『力を盡くして狭き門より入れ。我なんじらに告ぐ。入らん事を求めて入り能はぬ者  
おほからん。』』（文語訳）

#### 3. 一つの現実・言葉（ジェロームとアリサ、ジュリエット姉妹）と内面のずれ。

二つの視点（回想と日記）から一つの出来事を描く。→ 近代文学の手法

#### 4. キリスト教的生の理想（修道的）と世俗的生（恋愛・結婚）。

カルヴァン→ヤンセン（ジャンセニスム）：神の恩寵の意味の絶対化と人間の非力  
さの強調、人間の自由意志を軽視。17世紀にフランスで流行。  
女子修道院ポール・ロワヤル修道院、パスカル

←→ イエズス会・近代主義

#### 5. ヨーロッパの愛の伝統

C・S・ルイス『愛とアレゴリー ヨーロッパ中世文学の伝統』筑摩書房。

#### 6. ジッドとカトリック→フランスにおけるプロテスタントの位置

- ・『法王庁の抜穴』(1914)：「法王がフリーメイソンによって幽閉され、贗の法王に取  
って代わられているので、法王を救出しなければならないという名目で、献金を集め  
るといふ詐欺事件を中心に、神に向かう心を持つ人々と、神を否定する人々が描か  
れている」（山本、9）

#### 7. 『田園交響楽』(1919)

・1910年から1918年。ジッドは信仰（プロテスタント）の危機と夫婦間の危機。友人た  
ちはカトリックへの改宗を迫る。同性愛関係によって夫婦間の危機。

・盲目の少女ジェルトリュードを純粋な慈悲から引き取った牧師。牧師の妻、息子を含め  
た愛憎劇。ジェルトリュードは視力回復手術を受けたが、その結果、彼女は現実を直面し  
た。

- ・「イエスは言われた。『見えなかったのであれば、罪はなかったであろう。しかし、今、

『見える』とあなたたちは言っている。だから、あなたたちの罪は残る。』(ヨハネ 9.41)

『・・・そのままにしておきなさい。彼らは盲人の道案内をする盲人だ。盲人が盲人の道案内をすれば、二人とも穴に落ちてしまう。』(マタイ 15.14)

『・・・それは、『彼らは見るには見るが、認めず、聞くには聞くが、理解できず、こうして、立ち帰って赦されることがない』ようになるためである。』

・「見る・見える」という問題。

#### 8. 『一粒の麦もし死なずば』(1920/21)

『誠にまことに汝らに告ぐ、一粒の麦、地に落ちて死なずば、唯一つにて在らん、もし死なば、多くの果を結ぶべし』(文語訳)

#### 9. 自伝的告白文学：告白と誠実さの理想

「こうした少年時代の自分の性格の現われを説明しようとしてみるが、僕に与えられる答えはいつも一つしかない。それは、僕がその子供たちに、期待をこめた「あたしと遊んでくれない？」を言いながら、近づいて行って、断られたので、くやしきまぎれに、彼らの遊びの邪魔をしてやったということだ。」(堀口大学訳、新潮文庫、8頁)

「僕らの行為の最もまじめなものは、最も計算しなかったものだ。だから、事後におよんで人が探ねる説明は無益のわざだ。宿命が僕を導いていた。ともすればまた、そこには、自分の天性に挑戦しようとする僕の隠れた欲望があったかもしれない。なぜかというに、エンマニュエルのうちに僕が愛したのは、美德それ自身ではなかったか？・・・このしばらく後、僕らは婚約するに至った。」(395頁)

#### 10. 告白文学の伝統：アウグスティヌス → ルソー → ジイド

##### (2) アルベール・カミュ (Albert Camus, 1913-1960)

#### 0. フランスの小説家、劇作家、哲学者(学位論文「キリスト教形而上学とネオプラトニズム」)。

#### 1. 不条理：人間の生きる現実、そして近代世界を生きる人間の状況(ドストエフスキー)

「この世界は理性ではわかりきれない」が「人間には明晰さを求める死にもものぐるいの願望がある」、この対立状況が不条理。無意味な世界で意味を求める。

#### 2. 『異邦人』(1942)

・「自分の真理のために社会によって殺される「現代のキリスト」ムルソー」(山本、109)

・アルジェのムルソーのもとに、母(ママン、「無神論者ではなかったが、生きているうちに決して宗教のことを考えていなかった」10)の死亡電報が、養老院から届く。母の葬式のために養老院を訪れたムルソーは、涙を流すどころか、特に感情を示さなかった。友人のトラブルに巻き込まれ、アラビア人を殺す。逮捕され、裁判にかけられる。裁判では、母親が死んでからの行動が問題となる。人間味のかけらもない冷酷な人間であると糾弾される(「感動を示されないこと、母の年齢を知らなかったこと、翌日女と海水浴にいったこと、フェルナンデルの映画、最後に、マリイをつれて部屋へ帰ったこと」126)。裁判の最後では、殺人の動機を「太陽が眩しかったから」と述べた。死刑の宣告。「暑さ」「考える暇がなかった」。

#### 3. 『シーシュポスの神話』(1942)

・「真に重大な哲学上の問題はひとつしかない。自殺ということだ。人生が生きるに値する

か否かを判断する、これが哲学の根本問題に答えることなのである。」(12)

・ホメロス、人間の内でもっとも聡明なシーシュポス、「神々に対して軽率な振る舞い」「神々の秘密を洩らした」ため「休みなく岩をころがして、ある山の頂に運び上げる」「岩はころがり落ちてしまう」「無益で希望のない労働」という刑罰。「この神話が悲劇的であるのは、主人公が意識に目覚めているからだ」(213)。

↓

4. 反抗：『反抗的人間』(1951)。自殺でも革命でもなく、反抗。

自殺を不条理な運命を見つめない態度として退ける。不条理を明晰な意識のもとで見つめ続ける態度を「反抗」。それが生を価値あるものにする。

「反抗的人間とはなにか？ 否と言う人間である」、「反抗者の持つ「・・・する権利がある」という感じに、基づいている」(17)。反抗する人間としてのイエス。

5. 「神の死」の時代の誠実さ・真理。イエスへの共感。ジッドからカミュへ。

#### <参考文献>

1. 高柳俊一『近代文学のなかのキリスト教』南窓社、1981年。  
渡辺義愛「フランス近代・現代のカトリック小説の系譜」
2. 山本和道『ジッドとサン＝テグジュペリの文学——聖書との関わりを探りつつ』  
学術出版社。
3. 『幸福な死』『異邦人』『ペスト』『転落』『追放と王国』  
『カリギュラ』『誤解』『戒厳令』『正義の人びと』  
『シーシュポスの神話』『反抗的人間』
4. カミュ、サルトル 『革命か反抗か——カミュ＝サルトル論争——』 新潮社。